

## 博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	大橋 毅彦
論文題目	昭和文学の上海体験
<p>審査要旨</p> <p>昭和文学に「上海」という特異な都市がどう関わったのかを論じた、圧倒的な 1400 枚もの労作である。昭和期、とくにその初期から敗戦にかけての時期に、上海がさまざまな芸術表象の中で現われ、そこに滞在する日本人も多いことは知られてきたが、そこにどういうドラマが潜んでいたかは、まだまだ明らかにされてこなかった。論者は、この 20 年近くそのモチーフを温め、度重なる現地調査を踏まえ、中国の研究者とも交流しつつ、この膨大な論考を仕上げることとなった。簡単な紹介をするより、その目次構成を紹介することで、対象の広がり、従来明らかにされてこなかった人物への照明がどうなされているかを示したい。各章の副題は省略したので、論じられている人物・対象がわかりにくい場合は、注記して紹介する。</p> <p>「序章 〈魔都／摩登〉上海の次に〈在る／来る〉もの」</p> <p>「第Ⅰ部 拡張する上海イメージ」は全四章からなる。</p> <p style="padding-left: 2em;">「第一章 井東憲・『上海夜話』ならびに『赤い魔窟と血の旗』小論」</p> <p style="padding-left: 2em;">「第二章 金子光晴・『どくろ杯』」</p> <p style="padding-left: 2em;">「第三章 膨れ上がる芳秋蘭」（横光利一「上海」）</p> <p style="padding-left: 2em;">「第四章 上海・内山書店文芸文化ネットワークの形成と奥行」（雑誌「萬華鏡」）</p> <p>「第Ⅱ部 戦時下における詩の行方」は、全三章からなる。</p> <p style="padding-left: 2em;">「第五章 池田克己『上海雑草原』の〈光〉と〈影〉」</p> <p style="padding-left: 2em;">「第六章 草野心平「方々にゐる」に見る夢のきしみ」</p> <p style="padding-left: 2em;">「第七章 少年詩人が見た戦争」（木原孝一）</p> <p>「第Ⅲ部 国柄から流れ出る心」は、全四章からなる。</p> <p style="padding-left: 2em;">「第八章 明朗上海に刺さった小さな棘」（池田みち子）</p> <p style="padding-left: 2em;">「第九章 交わりと峻拒」（林京子）</p> <p style="padding-left: 2em;">「第十章 自責と矜持と」（同）</p> <p style="padding-left: 2em;">「第十一章 〈マラーネ〉ゲルハルトの赤い舌」（堀田善衛）</p> <p>「第Ⅳ部 異民族並びに多言語空間」は、全三章からなる。</p> <p style="padding-left: 2em;">「第十二章 戦時上海における亡命ユダヤ人芸術家と日本近代文学との出会いをめぐる一考察」（ブロッホ・草野心平）</p> <p style="padding-left: 2em;">「第十三章 D・L・ブロッホへのさらなる旅」</p> <p style="padding-left: 2em;">「第十四章 民俗の夢の坩堝としての劇場空間」（ライシャム・シアター）</p> <p>「第Ⅴ部 現地新聞・雑誌メディアの中を走る力線」は、全五章からなる。</p> <p style="padding-left: 2em;">「第十五章 邦字新聞「大陸新報」瞥見」</p> <p style="padding-left: 2em;">「第十六章 アポリアとしての〈正しき〉中国理解への道」（「大陸新報」）</p> <p style="padding-left: 2em;">「第十七章 初期「大陸往来」の一瞥（上）」</p> <p style="padding-left: 2em;">「第十八章 初期「大陸往来」の一瞥（下）」</p> <p style="padding-left: 2em;">「第十九章 《窓》と《繁星》」（室伏クララ）</p> <p>この目次構成からわかるのは、金子光晴・横光利一など従来から多くの研究者によって扱われてきた文学者だけでなく、論者が愛惜する文学者たちが、こと細かにすくい上げられ、論じられていることであろう。井東憲・池田克己・木原孝一・池田みち子・ブロッホ・室伏クララ——こう挙げて行くと本論文の世界が、どういう類いまれな知的関心と暖かい心情で構成されているかがわかる。</p>	

とりわけ、審査委員会の関心を引いたのは、D・L・ブロッホを追跡した部分であった。その部分は、学術論文の域を超え、一篇のノンフィクションといった色彩を帯びている。室伏クララへの眼差しも忘れられない。女性文学者が多く扱われているのも印象的である。いずれも、確実に従来の昭和文学史の書き換えを迫る業績となっていると思われる。

論者の考える本論文のねらいとして、次の点が挙げられる。

- ①文学者の内なる上海像を炙り出そうとしていること。
- ②文学史の陥没点を埋めようとしていること。
- ③接触や葛藤のドラマが繰り広げられる運動体として対象を見ようとしていること。
- ④多民族・多言語都市という回路を取り込もうとしていること。

論者の表現を踏まえて整理したが、それぞれ本論文において、その意図が十分に達成されていると考えられる。それを支えるのも、緻密な文献調査とあくなき探求心であろう。「大陸新報」の研究など、単なる雑誌紹介を超えて、文化史的にも貴重である。文学のみならず、さまざまな芸術世界への関心は、ライシャム・シアター研究にも発展する。共同研究者の協力あつての業績だが、それをまとめる論者の力量も忘れられない。

もとよりこうした研究は、終わりのないものである。いつ新しい資料が見つかるか知れない。しかし、関係者がまだ存命の可能性のあるこの時点で、こうした業績が出た事は貴重である。

上海の都市の特殊性は、これだけでは十分に跡付けられない点もあろう。現地の上海の人達がどういう生活を当時送っていたかも調べる必要がある。もう少し、文学者の上海体験の濃淡のさまが見えるともっといいのだが、という気にもなる。大正時代に上海に渡った文学者と比べるのも、今後の課題かもしれない。ともあれ、昭和文学の豊饒な世界が、このように上海が深く関わったことを、このように鮮明に明らかにし、提出したことは感動的でもある。研究の現状に切り込もうとする意欲も、高く評価される。著書として刊行されることで、学界に多大の刺激を与えてくれることを期待したい。よって、本論文を、「博士(文学)」の学位を授与するにふさわしいものであることを認定する。

公開審査会開催日	2016年 1 月 27 日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	氏名	専門分野	博士学位名称
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	中島 国彦	日本近代文学	博士(文学)
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	高橋 敏夫	日本近代文学	
審査委員	早稲田大学政治経済学術院・教授	宗像 和重	日本近代文学	
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	十重田 裕一	日本近代文学	博士(文学)
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	鳥羽 耕史	日本近代文学	博士(文学)
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	千野 拓政	中国文学	